



好奇心と化学的視点で中山間地域の未来を描く

保志 弘幸さん むかし田舎体験水車むら

Hiruyuki Hoshi

化学メーカーの研究職から心機一転マラウイの村落開発へ。

人と人との出会いを「化学反応」に例える保志弘幸さんは、
都会と田舎、今と昔といった異なる要素を融合させ地域に変化を呼び起こそうとしています。

現代に伝える 昔ながらの暮らし

JICA海外協力隊（以下、JOCV）経験者の保志さんが営む『むかし田舎体験水車むら（以下、水車むら）』は静岡県藤枝市の山あいにある。ここを訪れる人は、築250年の古民家での滞在を通して昔ながらの暮らしや自然の中での遊びを体験することができる。現代の生活で忘れがちな自然とふれあえる場所を作りたい、と保志さんが廃墟から蘇らせた。

「地元で脱サラしてUターンしたのが8、9年前ですね」マラウイから帰国後しばらくして故郷の藤枝市に戻った保志さん。趣味のトレイルランニングで近くを訪れた際に地元の人に声をかけられ、この場所の存在を知った。荒れ果てて

はいたが、つり橋や水車、かまどといった日本の原風景に魅せられ、翌日には履歴書を持ってオーナーを訪ね、片付けの手伝いを申し出たという。

今から遡ること40数年前。成長する日本経済と共に環境問題に関心が集まっていた時代に、この場所で地元の農家と東京の大学とで水車を使った自然エネルギー発電のプロジェクトがあったそうだ。しかし、うまく次世代へとバトンが繋げず、土地と建物だけが取り残されてしまった。保志さんは、持続可能な開発の視点で先人の思いを受け継ぐことを決め、空き家活用と雇用創出といった現代の課題と掛け合わせた新たな活動をスタートさせた。

火起こしからのご飯炊き、薪割り、囲炉裏を囲んでの食事といった田舎体験を通して、保志さんは「自分で感じて

考えてあそぶ」というメッセージを伝えている。その思いは、非日常的な体験を求める現代のファミリー層を魅了するだけでない。JOCVで培った行動力をバネに、最近では世界に視野を広げてインバウンド誘致にも取り組み始めている。

異文化理解と対話で 地域を繋げる

JOCV時代の保志さんは電気もガス





かまどに薪をくべる保志さん。火を起こしてから始めるご飯炊き



つり橋を渡った先にある築約250年の茅葺き屋根の古民家



プロジェクトのメンバーと復活した水車

も水道もない僻地に派遣され、村落開発普及員としてバイクで農村を走り回る日々を過ごした。稲作の普及や灌漑用水路の整備、そして小規模農家の所得向上のための活動までやるべきことは多岐にわたっていた。この経験で培われた異文化適応能力やコミュニケーション能力が、現在に大いに活かされているという。

『水車むら』を始めた頃の保志さんは、Uターンとはいえ期間が空いていたためによそ扱いされ「何しに来たんだ」「この地域には何も無い」といった否定的な意見に直面することもあったそうだ。そんな時は外国人として過ごしたマラウイでの日々を思い出し、多様なステークホルダーとの間には価値観の違いがあることは当たり前、というスタンスで行政や地域住民と対話を重ねていった。

JOCVに参加する前の保志さんは、プラスチックを作る化学メーカーで研究開発の仕事に従事していた。「化学とは医療や食料、教育といった根源的な悩みを解決するためにあるのではないか」当時の仕事は先進国の一部の人のための製品開発であり、本当に必要な貧困

層へ貢献できていないことに違和感を覚えていたという。やがて学生時代から抱いていた海外赴任への思いも相まって、JOCVへの応募を決意した。

「マラウイでは与えるよりも得られたものの方が圧倒的に大きかったです」世界の課題を肌で感じた一方で、自身の無力感を痛感することも多かったという。帰国後故郷に戻った保志さんは「組織の中で立ち回るよりも、小さくても個人として動ける方が性に合っていると分かりました」と、新たな自分のフィールドを見つけた。そして今、会社員時代とは比較にならないほど多種多様な人々との関わりに刺激を受ける日々を送っている。

「言葉の壁」の向こう側へ

化学メーカーの研究職からJOCVへ、そして現在は地域活性化の仕掛け人と一見すると大きくキャリアを変えてきたように見える保志さんだが、その根底には一貫した信念がある。それは、少年時代から続く「好奇心」と研究職で培った「化学的な視点」だ。

保志 弘幸さん プロフィール

1979年静岡県静岡市生まれ。小学生の活発な時期を藤枝市の中山間地域で育つ。大学卒業後化学メーカーに就職し、現職でJICA海外協力隊に参加。帰国後、藤枝市に帰郷し『むかし田舎体験水車むら』をスタート。2025年からは同市内に宿泊施設『つむぎ宿藤』をオープンし地域活性化に尽力している。

「個性豊かな人と人とが触れ合い、色々な変化が生まれる“化学反応”を見るとワクワクするんですね」保志さんは自身を化学反応を促進させる“触媒”に例え、人々が居心地よく活躍できる場や関わり方をハード・ソフト両面で整備することで、想像し得ない動きが生まれることを期待しているのだという。『水車むら』の活動そのものが「実験」だと考えているのだ。

最後に、保志さんは若い世代へ力強いメッセージを送る。「AIやデジタル化が加速する中で、人間らしさがより重要視される時代になる。だからこそ、リアルな現場で様々なことを感じて諦めずに挑戦してほしい」数多くの失敗を経験しながらも諦めずにここまで来た自身の経験が、その言葉に重みを与えている。

保志さんへのエール！

特定非営利活動法人
自然塾寺子屋 理事長
矢島 亮一さん



水車むらから持続可能な未来を期待したい

保志くんの熱い想いと行動力が、多くの人々に希望を与えています。水車むらの活動は、伝統文化と持続可能な未来をつなぐ素晴らしい取り組みです。これからも地域の発展と日本の農業・文化の継承にご尽力されることを心から応援しています！がんばれ水車むら、がんばれ保志くん